

主日礼拝

2024年2月25日（日）

題 「永遠の命を得る」

テキスト：ヨハネによる福音書10章19～30節

皆さん、おはようございます。

イエスが生まれつきの盲人の目を見えるようにしたことをめぐってユダヤ人たちの間に意見の違いが生まれたことを今日の聖書の個所は伝えています。

19:この話をめぐって、ユダヤ人たちの間にまた対立が生じた。

それはユダヤ人たちの間に対立関係をもたらしたのです。

20:多くのユダヤ人は言った。「彼は悪霊に取りつかれて、気が変になっている。なぜ、あなたたちは彼の言うことに耳を貸すのか。」

イエスが悪霊に取りつかれているという人々もいれば、

21:ほかの者たちは言った。「悪霊に取りつかれた者は、こういうことは言えない。悪霊に盲人の目が開けられようか。」

とイエスの行いに心を動かされ救いを求める人々もいたのです。

何かの出来事について意見が分かれるということは、昔も今も同じではないかと思われまゝす。その人の生まれてからこれまでの人生の送り方によるのか。生育歴やその人が強い影響を受け身につけて来た価値観によることもあると思います。わたしは、フランスの作家サンデグジュペリの「星の王子さま」という本に出てくる有名な言葉を思い出します。「ものは心で見える。肝心なことは目では見えない。」とのことばです。

さて、

22:そのころ、エルサレムで**神殿奉献記念祭**が行われた。冬であった。

と記されています。神殿奉献記念祭とは、「宮清めの祭り」とも言われます。

この「神殿奉献記念祭」という祭りの由来は、昔紀元前2世紀にシリア地方の王様であったアンティコス4世エピファネスという人物がユダヤを征服しました。彼はエルサレムの神殿にユダヤ人から見れば異教の神であるゼウス神の像を立てたり、ギリシアの神々に民に拝むことを強いたりしました。

それに対してユダヤ人のユダ・マイカバイオスという人物が立ち上がり、アンティコス4世エピファネスと戦って勝利したのです。これはユダ・マイカバイオスの名をとって、「マカバイ戦争」と言われています。時代は日本の歴史で言えば弥生時代となります。

マカバイの指導でエルサレム神殿は、清め直したのです。そのその事を記念する宮きよめの祭りでした。当時のユダヤ人たちにとっては民族の自立と尊厳さ

に関する、精神的にも極めて重要な祭りだったのです。ちなみに現在木曜日の夕の祈祷会では、旧約聖書のダニエル書を共に学んでいるのですが、ダニエル書が記されたのはこのマカバイ戦争の時期ではないか、という節が有力だとも言われています。ユダヤ民族とユダヤ教の存続に関する事柄だったということです。

この祭りは毎年行われ来たのです。現在でもハヌカの祭り（光の祭り）と言われ冬の季節に全世界のユダヤ教徒に守られているのです。民族的な祭りになっているようです。

聖書には「22:そのころ、エルサレムで**神殿奉献記念祭**が行われた。冬であった。」と記されています。

この時。イエスはエルサレム神殿の境内でソロモンの回廊を歩いておられました。24:すると、ユダヤ人たちがイエスを取り囲んで言った。「いつまで、

わたしたちに気をもませるのか。もしメシアなら、はっきりそう言

いなさい。」と詰め寄ったのです。**イエスの働きを理解しないユダヤ人たちは、イエスが明確に、はっきり、「自分はメシア・救い主」だということを聞いて、イエスを捕らえなかったようです。**

確かにイエスは、ユダヤ人たちに対して「私はメシア（救い主）」である）公然とは語ってはおられなかったようですが、神の元から来たということは語っておられたのです。（ヨハネ8章29節）また8章58節では人々に「アブラハムが生まれる前から『わたしはある』と言われています。」 また、ある時、イエスはサマリアの町で疲れて井戸のそばに座っていた時に井戸に水くみに来たサマリアの女との出会った時には、「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。」（ヨハネ4章25節）と語る女に対して、「**それは、あなたと話をしているこのわたしである。**」（4章26節）と語っておられます。

ユダヤ教の伝統や律法・規則を重んじるユダヤ人たちは、イエスの言葉や行いを受け入れず、イエスを捕まえたいとチャンスを待っていたのです。ユダヤ人たちは既に、イエスをメシアであると公に言い表すものがあれば、会堂から追放すると決めていたのです。これはユダヤ人社会から締め出すことを意味していたのです。

それに対してイエスは毅然と答えられました。

25:イエスは答えられた。「わたしは言ったが、あなたたちは信じない。

わたしが父の名によって行う業が、わたしについて証しをしている。

つまりイエスは父なる神とその心は一つであり、つながっていることを

示しておられたのです。多くのユダヤ人たちは、そのことを理解できなかったということです。分かれようとしないうし、信じないということです。

26:しかし、あなたたちは信じない。わたしの羊ではないからである。イエスに悪意を持つその場にいるユダヤ人たちは、「あなたたちは信じない。」。つまりイエスが天と地を造られた神の元から来たことを信じない、ということです。先週のイエスを羊飼いとし、その声に聞く羊の関係で言えば、イエスを信じない人々とは、羊飼いであるイエスの羊ではない、ということになるのです。なぜなら羊は、自分の羊飼いの声を聞き分けるのです。そして自分の羊飼いについていくのです。これがイエスが語られた羊飼いと羊の関係なのです。これは神と神を信じる者たちとの関係とも言えるのです。

27:わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。

そしてイエスは、極めて大切なことを語られました。

「28:わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない。」と。

永遠の命を与える。「永遠の命」とは何でしょうか？ みなさんはどう思われますか？ 永遠の命とは、漠然としたものではなく、**永遠の命とは、愛なる造り主なる神さまと共にある命、救い主なるイエス・キリストと共にある命だと思えます。**他の聖書の訳では、何にも勝る宝物、いつでも明るく生き生きする力、ほろびない、とか訳されています。

29:わたしの父がわたしにくださったものは、すべてのものより偉大であり、だれも父の手から奪うことはできない。

永遠の命とは、人間が自分の力で手に入れることのできるような命ではなく、神さまが与えてくださる命のことです。永遠のいのちとは、神さまが与えてくださった信仰と希望と愛に満たされたいのちと言えるでしょう。それは、「いつまでも残る」のです。「30:わたしと父とは一つである。」とイエスさまは言われます。イエス・キリストと神は一つなのです。つながっているのです。神様のことをわたしたちに分からせてくださるのは、イエス・キリストことばと愛の行いであり、神が与えてくださる聖霊。神の力によるのです。イエス・キリストと心でつながった人は聖書の語る造り主なる神さまとつながっているのです。ですから、わたしたちは安心して、愛なる神を褒めたたえながら与えられた人生のあゆみを送ってよいのです。造り主なる神と主イエス・キリストに感謝します。日々信じる者たちに働きかけてくださる清き慰めの霊、聖霊の働きに感謝します。 **皆さまの上に、主の平安を祈ります。**